



## 巻頭言

### 世界の水環境問題と第4回世界水フォーラム

Motoyuki Suzuki  
環境審議会会長 鈴木基之

我が国において一般市民が、水に意識を向けるのは、渇水時の断水、身近な河川などの汚濁、異常降雨による水害、飲料水の異臭味など様々な個別の事態に面するときであり、それぞれは、きわめて地域性の強い問題として考えられてきたといえよう。

このような水の問題に関して、“世界水フォーラム (WWF)”として1997年にマラケッシュで小規模の集まりがもたれてから、3年に一度定期的に開催されるようになり、第2回のハーグにおいては5,000名を超える参加者、第3回の京都においては国内からが多いとはいえ、2万人を超えるという多数の参加者があったというのは興味深く、今回メキシコ市において開催される第4回はどのような規模になるのか関心を持っておられる方もおられよう。

つい最近、地球上の人口は65億人を超えたが、このうち10億人が清潔な水の供給を受けておらず、24億人が衛生的な施設（下水道など）にアクセス出来ていないという国連の統計はあまりにも有名である。国連の2000年サミット、および2002年のヨハネスブルグサミットにおいてこの両方の数字を2015年までに半減させるという目標も立てられている。しかしながら、この数字の大半を抱える途上国に対して、工業化諸国がいかなる形でかわり、この目標を達成しようとするのか、従来型のODAが適切なのか、余りにも漠然としているのが現状である。このほか、水に関わる疾病によって毎日6千人を超える子供が命を失っているなど、清澄な淡水資源に関しては、量、質ともに極めて厳しい条件にさらされている地域が多いのである。

世界の人口は増え続け、50年後には地球上に90億人が住むことになることと推測されており、一方において淡水資源は増えようがないので、今世紀においては水をめぐる紛争の各地における多発が予想され、20世紀が“石油の世紀”であったのに対し、21世紀は“水の世紀”となるとの予言もなされている。

このような背景に加え、グローバル化は経済の世界だけではなく、まさに温暖化の進行などに象徴されるグローバルな規模での気候変化によって量的に限られた資源である地球上の降水量の地域的な分布が変化してくることも認識されるようになった。年平均の降水量の地域的な分布は、たとえばアジア地域においては、沿岸域での降雨量は増えるが、内陸域での乾燥化が進むとの予測や、特定の地域における雨の降り方も変化し、異常な多量降雨、異常渇水などの事象が増えることにより災害の多発、地域生活への影響なども心配されるのである。

温暖化の進行に伴って、人間生存の基盤となる自然生態系の変化、感染症の多発、水質の汚濁の一層の進行なども予測され、水によって地域の発展が抑制される地域も生まれてくるのが実際である。このような状況を受けて、水問題が地域ごとに特有な問題であり、それぞれの固有性を考慮しつつ、その解決のために国際的な連携を深めていくことが求められているのが、WWFに多数の人々が結集する基本的な理由であろう。

このような情勢の中で我が国はどのような国際的な協力を進めていくのかという面での簡単な答えはないであろうが、工業化諸国の一員として、特に近隣諸国から始め、多様な問題を協働作業によって解決する方向での力を惜しんではならないであろう。ともすると我が国が環境問題の先進国であり、過去の我が国の経験や技術開発などを途上国に移転すればよいと言われることも多いが、途上国の今後の発展形態はかつての我が国と同じ経路を辿ることが望ましい訳ではない。むしろ、問題を抱えた諸国からその課題のおかれた状況を学び、まさに協働作業を通じてそれぞれの特殊解を探っていく努力が必要なのである。

WWFにおいては、極めて多様なセッションが150位設定されているようである。それぞれのトピックスに対して、一つでも問題解決につながる力が生まれてくることを期待したい。